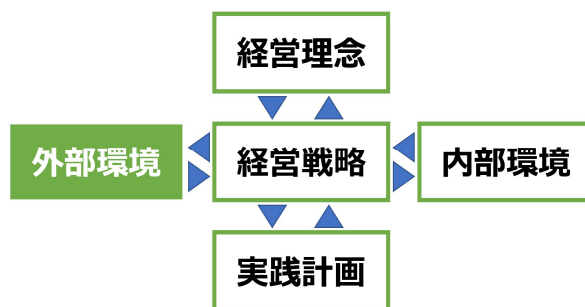


「外部環境」を考える・その1

企業経営漫談士 岡野実空

外部の経営環境を考える代表的な切り口は、“PEST”。近代マーケティングの父、P・コトラーのいう、P (Politics)、E (Economy)、S (Society)、T (Technology) の4つです。これは役員や経営企画向きの視野ですが、現場ミドル用としてはややマクロ的過ぎるかもしれません。

ということで今回は、それを実務レベルに近づけ、時間、空間、人間の三間と、物質やサービスなど、よりミクロの視野で企業の「外部環境」を考えます。まずは、『諸業無常』と『無縁経済』の2つから始めましょう。



其の1: 『諸業無常』

今回のコラムは「四字」ではなく、「誤字」熟語かと思われたかもしれません。その原語は、もちろん『諸行無常』。万物は常に変化して、少しの間もとどまらないということ。『平家物語』の冒頭で、日本人のだれもが知る？ 仏教の根本思想「四法印」（一般的には「三法印」）の端緒です。

その対象が万物である以上、企業、事業もまた風の前の塵に同じ。実際、昭和の後半に30年といわれた企業の平均寿命は、平成で半分以下となり、令和で一桁台に突入することはほぼ確実でしょう。

そこでは、欧米のように事業を商品と割り切り、高値でさっさと売却するのの一法ですが、いまだに企業を共同体と考える我が同胞の意識を踏まえると、事業を巧みに入れ替えつつ、企業を存続させて行く方が妥当です。しかしそのとき、対象となる事業に関わる個々人には、自分が企業、事業のどちらを選択するかという覚悟が求められるのです。

そこで必要になるのが二番手『諸法無我』の認識。あらゆるものには実体がなく、結局は他の要素との関係（因縁）によって存在するという自覚です。それは居心地の良い共同体の中では得られにくいので、その枠から一旦離れて組織の内外を俯瞰し、自分の立ち位置を冷静に見定める努力が肝要です。

因みに、残る二つのうち『涅槃寂靜』は、凡人にとってなかなか到達困難。その裏返しに『一切皆苦』は、生きている限り続きます。（まれに途切れるとき、私たちは小さな「幸せ」を感じます）

其の2: 『無縁経済』

「無縁社会」は、10年前の NHK 特集の題名に使われた四字熟語。我が国における昨今の共同体崩壊を的確にとらえた造語として、その後すっかり世の中に定着してしまいました。

しかしここでとりあげる『無縁経済』の「縁」は、その「つながり」ではなく、元祖「ふち」「へり」(border)の意。その反語としての「ボーダーレス」は、社会のさまざまな分野で、以前から幅広く使われて来ました。いま政治の世界は、アメリカ化を意味するグローバリズムの反動としてのナショナリズムが台頭中。しかしながら、それと表裏一体の経済では、後戻りできないほどにグローバル化が進展しています。実際、この原稿を打っているパーソナルコンピュータの製造に関し、私が知っているのはメーカーと国だけ。その部品や素材の出自は、まったくわかりません。

ここで皆さんに考えてほしいのは、自社の実情。デジタル化が加速させた『無縁経済』に対応する経営、すなわち『無縁経営』の理解度、実践度です。その戦略や組織は、それに相応しい体制や運営になっているでしょうか？ まさか、それを阻害するセクショナリズムなど存在しませんよね？

ここで確認しておきたいのは、政治、経済、文化を問わず、お互いに真価を認め合い、相乗効果を発揮して進歩することを阻むのは、いつの世も「心の国境」(差別、偏見、思い込み)だということ実です。

2020年1月27日 実空